TOPICS

コウノトリを守ることは
地域の農業、人の暮らしを守ること。
コウノトリが舞う笑顔輝く未来を夢見て――

巣上の雛たち。名前は、渦（うず）、めい、海（かい）。地元の子ども達が名付け親です。（写真提供／NPO法人 とくしまコウノトリ基金）

春の訪れとともに、鳴門市大麻町板東のコウノトリにも恋の季節がやってきました。期待を込めて見守るのは、NPO法人 とくしまコウノトリ基金（熊谷幸三理事長）の皆さん。コウノトリが生息できる豊かな自然を守り、コウノトリなどの希少鳥類と人間が共生できる地域づくりを目的に、令和元年（2019）8月に設立されました。

国の特別天然記念物であるコウノトリは、水田や湿地など、かつては日本中に生息していました。明治以降の乱獲や、農薬の影響でエサとなる水生生物が激減したことで個体数が徐々に減少し、昭和46年（1971）に野生下では絶滅。その後、人工繁殖させた個体を放鳥し、平成19年（2007）に兵庫県豊岡市で初の野生繁殖が確認され、その後も毎年繁殖しています。

鳴門にコウノトリがやってきたのは平成27年（2015）春。別々に飛来した若い2羽のコウノトリが電柱の上に巣を造り始めました。この「鳴門板東ペア」は平成29年（2017）に初めて雛を育て上げ、巣立ちに成功。豊岡市以外では初の野外繁殖という快挙に、関係者は沸きました。「鳴門板東ペア」はその後も5年連続で繁殖し、計14羽が巣立っていきました。

突然やってきた（ように見える）コウノトリ。コウノトリは水田に生息するザリガニ、カエルなどを主食にします。鳴門市をはじめ、吉野川下流北部は全国有数のレンコンの産地。レンコン畑は一年のほとんどを、コウノトリが採餌するのに最適な浅い湛水（たんすい）状態で管理します。しかも、長年にわたる減農薬栽培への取り組みで、水生生物が豊富に生息しています。これが「コウノトリが鳴門を選んでくれた」理由ではないかと理事長の熊谷さんは話します。

「うちのペアは夫婦仲がよくて、子育て上手！」と目尻を下げる熊谷幸三理事長

耕作放棄地を再生してビオトープを整備
（写真提供／NPO法人 とくしまコウノトリ基金）

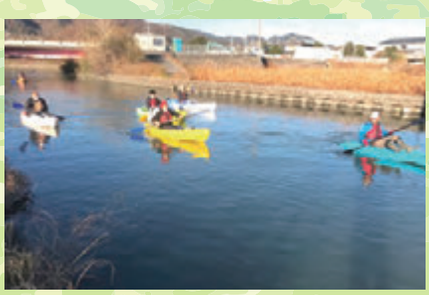
とくしまコウノトリ基金では、エサ場となるビオトープの整備、固定カメラでの観察、水生生物の調査など、年間を通じて活動しています。こうした保護活動が実り、県外からの飛来数も飛躍的に増加。令和3年には74羽が飛来しました。順調に見えますが、定住しているのはまだ1ペア。「第2、第3のペアを！」と力が入ります。

「コウノトリは日本の農業とともに生きてきた。農業を元気にし、それを取り巻く地域の産業・経済を活性化したい」と熊谷さん。地元の農家や企業と連携し、レンコンや米、日本酒などコウノトリブランドも続々。さらに、「コウノトリがいつも鳴門の空を飛んでいるようになると観光資源になる。生息地を巡るカヌーツアー、ポタリングツアーなども開催したい」と夢はひろがります。

取材を通じて出会った皆さん、どの方も素敵な笑顔でした。コウノトリはやはり「幸せを運ぶ鳥」なのですね。

2020年11月～2021年３月には絶滅危惧種のナベヅルが吉野川中洲に飛来。板東でエサを食べる姿も見られました。コウノトリとナベヅルがいっしょに見られるのは全国的にも珍しいとか
（写真提供／NPO法人 とくしまコウノトリ基金）

減農薬、有機肥料で栽培したビオトープ米を収穫。収穫した米は松浦酒造場でおいしい日本酒に



ビオトープ周辺を流れる大谷川をカヌーで下りました
（写真提供／NPO法人 とくしまコウノトリ基金）

堀江北小学校での環境学習プログラム
（写真提供／NPO法人 とくしまコウノトリ基金）